

栄養士から見た阪神・淡路大震災

— アンケート調査からの一考察 —

大谷貴美子・小西洋太郎・枇杷木ひとみ・春木 敏

Dietitian and Hanshin-Awaji Great Earthquake -Opinion from Questionnaire Study-

KIMIKO OHTANI, YOTARO KONISHI,
HITOMI BIWAKI AND TOSHI HARUKI

序論

1995年1月17日未明に、阪神、淡路地区を襲った大地震は、関連死を含めると6,000余名の死者とともに、未曾有の大被害をもたらした。交通網、情報網の寸断の中で、数多くのボランティアに支えられ、懸命な復旧活動が開かれたのは記憶に新しいところである。

ところで、今回の震災は、文明社会を享受していた我々に、災害復興に関して、また災害対策に関して大きな教訓を与えてくれたのも事実である。

そこで、我々は、食教育に携わる者の責任として、特に被災者の“食”にまつわる諸問題について、今回の震災で得られた貴重な体験を眠らせることなく記録に留め、今後への示唆を得ようと、被災地現場に居た“食”のプロである栄養士達にアンケート調査を行った。

本研究では、それらのアンケート調査の中から、主として、被災地であって、本人が栄養士としてどのように活動出来たかという問題に焦点を当て、災害時に職能団体としての栄養士組織がどうあるべきか、また我々栄養士教育に携わっている者は、どのような責任を果たすべきかなどについて検討を行った。

調査方法

1. 調査対象

兵庫県栄養士会の名簿を参考に、阪神・神戸地区の栄養士、約900名の中から、職域別人数比に合わせ、行政9名、病院48名、教育養成11名、公衆栄養推進25名、産業7名、福祉13名の他、学校については、避難所として利用されたところが多かったため、全員の37名の、計150名

の栄養士を選び、調査対象とした。

2. 調査時期

1995年4月5日に郵送でアンケートを配布し、同年5月8日を締め切りとして、郵送で回収した。

3. 調査内容

アンケートの質問項目はすべて自由回答方式とし、できるだけ回答者の生の声が聞けるようにした。アンケートの内容は大きく、以下の5つに分けられる。

(1) 救援物資（食糧）の実状と問題点について

震災後1週間、2月以降ライフライン復旧まで、ライフライン復旧から4月時点までの3つの期間について、救援物資の実状と問題点について質問を行った。

(2) ボランティアの果たした役割と問題点について

(3) 被災者の食生活上の問題点について

特に、自宅被災者の食生活に認められた問題点について質問を行った。

(4) 本人の栄養士としての活動について

(5) 社会に対する提言

本研究では、これら質問項目の内、主として(4)および(5)についてまとめ、考察をおこなった。

結果および考察

(1) アンケート回答者の内訳

アンケートの回収率は、あまりにも大きな災害の後であったこと、アンケートの時期が年度始めの忙しい時期と重なったことから、34%（51名）と、低かった。その内訳は、学校22、病院11、教育養成2、福祉5、行政（学校）1、その他10名であった。但し、回答の際に、仕事

の立場上、専門職の栄養士として回答出来ないことも想定し、一被災者としての回答も可としたため、その他の人数には一部そのような回答者も含まれている。しかしながら、災害対策において、指導的立場にあったと考えられる行政職の栄養士としての回答が少なかったことは、残念であった。回答者の職場、および、居住地区は、図-1に示したが、職場では、神戸市が最も多く(31.4%)、次いで西宮市(11.7%)、芦屋市(7.8%)であった。また、居住地区では、神戸市が19.6%と最も多かった。

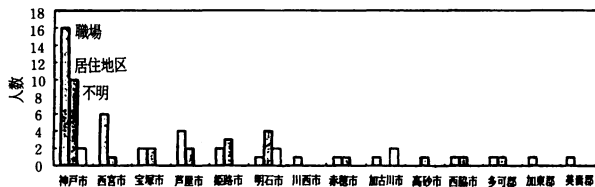


図-1 アンケート回答者の職場および居住地区

(2) 栄養士としての活動について

「今回の震災の中で、あなたは栄養士としてその能力を十分に発揮できましたか?」という質問を行ったところ、図-2に示すように、約半数の栄養士は、発揮することが出来なかったと答えた。それらの内容を職域別に検討してみると、図-3に示すように、病院、学校等、大勢の喫食者を抱え、なおかつ大量調理施設を備えている組織にいた栄養士は、活動できたと答えている割合が高いようである。食材等の供給についても病院へは優先的に配布されたこと、また系列病院等からの物資の援助があったこと、普段からいくらかの備蓄があったことなどから、比較的栄養士の仕事がスムーズに行えたようである。毎年多くの栄養士が養成されているにも関わらず、現場でその人達の姿が殆ど見えなかったという声が聞かれるように、組織の外に居た栄養士を含め、組織の中にあつた栄養士ですら、十分にその能力は発揮されていない。これは、普段から、栄養士の職域が(業務)が明確にされていないことや、各組織における栄養士の人数が少ないこと、また普段からの組織力の弱さが無関係とは思われない。さらに、我々栄養士養成に携わっている立場としては、実践力のある栄養士養成を考える必要があると思われた。また、「他府県から派遣された栄養士は力を十分に発揮できたと思いますか?」という質問に対しては、図-4に示すように、半数以上の栄養士が、派遣すら知らなかったと答えており、相互の情報伝達機能が稼働していなかったことが窺える。各都道府県の栄養士会同士のいわゆる横の連携と、県内のいわゆる縦の情報

の流れが不十分だったと考えられ、情報ネットワーク構築が急がれるところである。

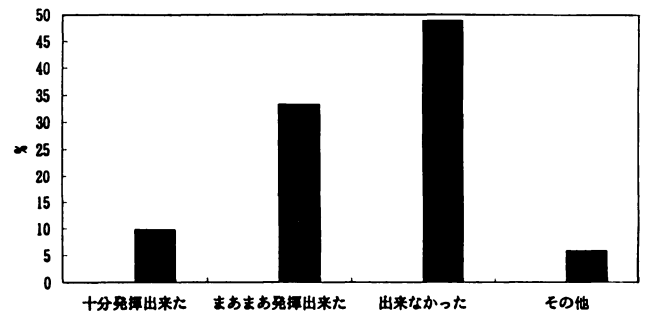


図-2 栄養士として能力を発揮できましたか?

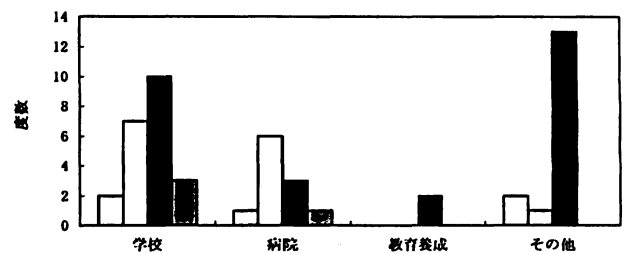


図-3 栄養士として十分に力が発揮できたか?

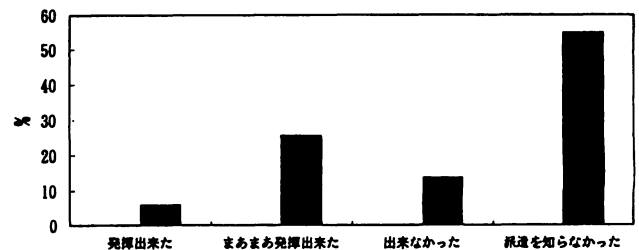
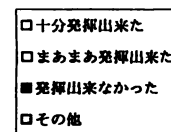


図-4 他府県から派遣された栄養士は能力を発揮出来たと思いますか?

そこで、栄養士として、活動できなかつたと答えた者に、その理由を書いてもらった。当時の混乱状況が窺えると考え、文脈が通じないところもあつたが、以下には、その生の声を出来るだけ忠実に(特に内容に大きな影響を与えないと判断した場合、部分的に削除したところもある)職域別に記載した。

1) 病院栄養士の場合

a. 看護婦、栄養士、調理師の連携がうまくいかなか

った。せまい調理場に多くの物資が山積みになれ、その整理に追われた。最初の頃は、栄養をとるための食事ではなく物資を整理する為の食事のような時もあった。日がたつにつれ、熱源の確保が徐々にでき、少しは考えた食事が提供できるようになった。他の病院がどうしているのか、どんな工夫をしているのか情報収集ができなかったのも悔いが残る点である。

b. あの時こうすればと思ったり、そんなことが多いです。当初出勤できなかったことが最大の失敗でした。

c. 一般の栄養士としては十分に、できる限り手をつくし、発揮できたと自己採点する。しかし病院の栄養士としては、比較的元気な人には、喜ばれもしたが、歯のない人、精神的にも、また病気で食べられない人の栄養補給を考えるとすまない気持ちでいっぱいである。

d. 救援物資の保存、管理に力を使っただけである。一生懸命に行った給食に対して、不平が出たのは力量不足であったと思う。

e. 当初、おろおろするばかりで、なにから手をつけていいかわからず、薪で炊くかまどの手配、プロパンの手配等、他の職員がしてくれて助かった。早く頭を切り換えて迅速に手配しなくてはと反省している。

2) 学校栄養士の場合

a. 交通が遮断され、いらいらしながらも1週間職場に出勤できなかった。

b. 私がしたことは、救援物資で調理師さんが作ったものを、避難された方に、今日はこれ、夕方はこれです、また、ボランティアの人が来るのでつくらなくていい日を調理師さんにつたえる。避難されているところと給食室の往復だけでした。(これは調理師さんが自発的に炊き出しをしてくれたおかげです。)

c. 炊き出しには行ったが、市の方針や制限の中での活動なので、自分の判断でできることは少なかった。家では家族の世話に追われ、地域に貢献できなかった。

d. 出来た、出来ないの状況がどこにもありません。

e. 物資を運んだり、管理したりするのに忙しく、炊き出しもないところなので栄養士の仕事はなかった。

f. 何もなくて、ただ荷物運び、日用品の配布等で日々暮らしていきました。早々の給食再開に向け、栄養確保の為、いままで登場させなかった食材をたくさん使用しつらかった。

g. 災害時における栄養士の役割分担が出来ていなかったのので、私自身、何をすれば良いかわからず困った。

h. 栄養士という職業を前に出せる状況ではなかった。

3) 行政(教育委員会)栄養士の場合

a. 先々に起きうる問題を想定し、即対応できる様、国、県に要望すべき項目の資料作成および各行政機関との連絡の取り合いに追われ栄養士らしきことは殆どできなかった。

4) 教育養成の場合

a. 組織の中で計画されたボランティアには参加したが、やはり自分のことで精一杯で、満足するには程遠かった。

b. 2月末までは、自分自身の生活と仕事に追われていた。3月に入って活動し始め、避難者への指導、対策本部への具申、自炊援助のための教育炊き出し(補食としての野菜料理)と、パンフを用いて教育、救援グループ間の協力などを行っているが、もっと早期に栄養士会組織を通じて、対応策をたて、対処すべきであったと反省している。栄養士組織の社会性のなさに愕然とした。再建の必要性を痛感している。

5) その他

a. 被害者意識が強く、他の人に手をさしのべる意欲がわかなかった。後から悔やまれた。

b. 職場がJR六甲道ですが、1日も出勤することもなく解雇となりました。

c. 2月1日から保健婦とともに、従業員の中で被災された人を対象にして避難所をまわったが、当時は電子レンジやガスコンロのあるところが少なかったため、食事に関して十分な話もできなかった。4月に入ってからもう1度、避難所から出勤している人を対象に食事状況アンケートの聞き取り調査を行った。ストレスとビタミンの話などもしたが、自分としては栄養士として力を発揮できたとは思わない。

d. 自分自身が被災者の1人であったため、自分の家の片づけ、水くみなどの生活に追われ、ボランティアとして自ら飛び込んでいけるだけの余裕がなかった。

以上は、自らの判断で栄養士として力を発揮できなかったと評価し、その理由を書いている中から、その理由をピックアップしたものだが、実際にはかなり活動されている方もあった。活動出来なかった理由を見ると、自らも被災者であり、交通網の遮断の中で、自分と家族を守らねばならない状況下にあった栄養士達の苦悩が分かる。こういった状況下に、栄養士として何が出来たかを質問したのはむしろ酷であったかも知れない。むしろ、被災地の外にあった栄養士、食教育に携わっている我々が、どのような行動を起こしたのか、どういった行動をしたのかの方を問題にすべきであったとも思われる。しかしながら、ボランティア活動の中でも栄養士の活動は

目立たなかったようであり、組織的に行動を起こすべきであったと考える。

(3) 栄養士達の提言内容から

次に、「栄養士としてどのような提言を社会になさりたいですか?」という質問に対して、得られた提言をやはり職域別にまとめた。

1) 病院栄養士の場合

a. 豊かな社会になれた人にとって、食べられればよい食事というのは長くはガマンできない。食べることはゆとりにつながる。多くの老人達は、毎日毎日配られる菓子パンとジュースや、さめてかたいおにぎりを、そのまま置きっぱなしにしていた。避難所では電気ガス等の調理器具の使用は禁止となっていた。さめたおにぎり、冷たいジュース、お湯のないカップメンには悲しいものがあった。避難所での栄養の問題が話題にのぼったのは2ヶ月以上たってからのことでカロリーを2,400kcalに、野菜不足を補うために野菜サンドを入れるなど、とても栄養士が考えたとは思えない。栄養士はもっと発言すべきだと思った。——

b. 2-3日だけの緊急事態なら非常食で対応できるが、今回のような長期に渡る災害ではパン、おにぎり、弁当のような食生活で体調を崩す人は多数いる。特に、病人をかかえる私たちにとっては、食事が病状悪化につながる。対応策としては、今回のような大災害を想定して、災害対策マニュアルを作成し、実行できるよう訓練することであろう。また、1日に必要な栄養分がとれるコンパクトで味のよい食品を開発して救援物資に加えても良い。

c. 料理を作るには基本的には火と水と食材があればできます。それを盛りつける食器(使い捨て)と箸があれば食事ができます。災害時には、上記の火、水、食材、食器、箸の早期確保が必要です。

d. 栄養士の地位の向上というか権限の必要性——。

e. 今回、栄養士側と病院側と意見の違いがいろいろあったと聞きます。やはり、何よりも、患者のことを第一に考えられる栄養士でありたいですね。

f. 簡単、簡便を追求す余り、楽な方へ流される。そのため自然から与えられる様々な親切に鈍感で、無視し、自然を破壊しても気づかないできている。自然の揺り戻しがいろんな形で、人間への問いかけであると思う。自然に感謝し、何のため自分が存在しているかをしっかり自覚し、考え、行動できる人が育つ社会を皆で造りたい。

g. ——災害時にはその場限りの対応しかできない。いかに普段努力しているかがすべてにおいて試される時

で、——。そんな中、一方では病院(給食)のセンター方式等ささやかれているようだが、全く言語道断まかりならないと感じた。もっと病院の給食というものを平常より国も栄養士も大事にするべきである。また、栄養指導をしっかりといたからこそ、患者さんもよく勉強していたからこそ、糖尿病の人に聞くと、食事は何とか乗り越えられたという声も耳にした。これを機会に栄養指導の普及をよりいっそう病院栄養士として自覚し、国のバックアップをもっと大なるものにしていただきたい。

h. 病院では、最低2日分の非常食の備蓄が必要である。(特別治療食対応も含めて)また、非常時体制を職場内および近隣施設、栄養士会内に作っておくことが必要である。

i. ライフラインが絶たれた場合、最初の3日間どうやっていくかということ、今後は肝に銘じて仕事をしようと思います。3日後には、支援が入るということで備蓄を考えていますが、自給自足のようなことも考えてみるべきかもしれません。流通に頼りきるのではなく、身近に生産地を持つということも大事ではないでしょうか。

j. ——3日から4日分の備蓄は必要だと痛感しました。また取引業者は、近隣が多いのですが、店に残っていて使える物をもってきてくれたりして助かりました。やはり、地域の中の施設として地域とのつながりを大事にしなくてはと思いました。

k. 各都道府県の災害対策本部と栄養士会の関係を組織の中に入れていただき救援物資、食事内容について助言できるようにすべきだと思います。

2) 学校栄養士の場合

a. 災害は経験したくないが、万が一の時はどうすればよいか、また万が一に備え、公共の場所に食糧の備蓄、ライフラインの確保を考えておく必要がある。

b. 物を運ぶことがどんなに大切かが分かりました。空の輸送を考えて、そこからスピーディーに運べる道をきちんと考えるべきである。

c. 体力がなければ何もできない。体だけがとりえという言葉があるが、これはすごいことである。日頃からいろんなことに備え、体力をつけておかねばならないと思う。また、飽食の時代で、よく皿にのった食べ物を捨てている人がいる。食べ物の大切さをもっともっと体で感じ取ってほしい。食品添加物、日頃は避けるが、地震の時は保存がきき助かった。

d. 栄養士として矛盾の世界を知りました。生きるためには——。栄養士というのはあふれた食材(糧)と優雅な生活の中で発揮できる仕事か。生きるか死ぬかの目

前では食べ物であればどんなものでも身体はきちんと消化してくれます。

e. すぐに食べられる食料の確保。給食施設の開放で、炊き出し可能になるような施策。

f. 物が豊富な時代であるので、水の大切さ、食物の大切さを忘れていたので、水を含めた資源の大切さと、その備蓄を訴え、自らも、災害時を予期した食生活の改善を考えていきたいと思えます。

g. 栄養士は実践力を養うこと。今回の震災の場合等は、食事作りを率先して指導すること。

h. いくら立派な献立でも材料がなければ食事になりません。今回ほど材料の調達が大切と感じたことはありません。——流通面で、多方面の流通経路、配送経路を作っておくべきと思えます。

i. 何か大きいことが起こっても、1人では何も出来ない。組織で動ける体系を作っておくことも必要と思われた。

j. 専門職である栄養士が食教育を充実させて各家庭で健康な食生活の在り方を実行して欲しい。

k. 栄養士自身が職場に1人しかいないので、ボランティアに神戸市の方へ出かけたかったと思っても、やっぱり自分の職場の都合で自由に動けなかったが、それでも教育委員会などが栄養士の動員を積極的にして下されば、もっと動きやすかったのではないのでしょうか。

l. 被災者の疾病状況と食事との関連をつかみ、今後、災害時の食事内容の充実に、栄養面からも発言できるようにしなければならないと思う。

3) 行政(教育委員会) 栄養士の場合

a. 食品の流通機構を勉強するべきと考えさせられた。

4) 教育養成の場合

a. 災害時の食のKey stationのようなものをつくって、情報の発信なり、食材の備蓄などをやれたら良いのではないだろうか。

b. 基本的には生命を司る食は自分自身で調達すべきである。非常食の家庭内備蓄、非常時の調理法などの知識、伝達を行う。栄養士組織への呼びかけ。常に、社会性を身につけ、非常時においても正しく分析し、組織として行動できる力をもたねばならない。

5) その他

a. 2ヶ月以上避難所におられた方は、パンを見るのがいやになったとあって、お菓子ばかり食べていたそうです。その人達に社会復帰のために食べ物を購入し食べてもらうよう勧めなければと思います。

b. 公務員の栄養士が中心となり、炊き出しを行ってほしい。また、災害の時の為に、人員も増やしてシステ

ム作りを行ってほしい。

c. 日本の豊かすぎる食生活もあと10年と言われ、2050年には人口増加に食糧供給がおいつかず、地球全人口が「飢餓」の状態になると予測しています。日本人のあまりにもぜいたくすぎる食生活を見直す時期ではないでしょうか。食の真の方向性を真剣に考えることも栄養士としての社会的任務と考えています。

d. 食生活は、1日、2日みだれてもすぐに健康が害されるということがないが、日々の積み重ねで、後に問題がでてくる。罹災者も、行政も復旧をあせるあまり、食事にしよわせがこないよう注意しなければと思う。栄養士として、その点PRが必要と思えます。お金をかけた食事がよい食事ではないから、個人で気をつければ、十分に栄養所要量は満たせる状況と思えます。

e. 困っている人達がいる時に、本当に今一番必要としているものは何かということを見極める目を養う。自己満足で終わらない。大きなものにかくされた小さな命を大切に、平等の意味をとりちがえない。

f. 災害時にはまず医者と看護婦が活動し、それ以降は栄養士が組織的に大きく動いて行かねばならないと思いました。栄養士の活躍は医者や看護婦の力の影に隠れている状態ですが、災害時に活躍した栄養士の姿も社会にアピールしていくべきだと考えます。

g. 震災直後は「食」に対する要求が一番であったが、時間が経過するに従って「衣」や「住」に移り、今現在の関心事は「住」のみであるようだ。しかし「食」がいざという時に第1に必要ということを感じるのは短期間で、その内容も初めは何でも食べられればよかったから、徐々に質を求めてきている。しかしライフラインが戻ってくるようになり「食」は、食べることができればという形に戻ってきている。「食」が確保でき、「衣」「住」に欲求が移ると、「食」の内容を問わないというのが興味深い。——

以上、社会への提言といっても殆どが感想といった感じではあったが、栄養士達の生の声を記録に留めるべく、いくつかを拾い出してみた。これらの声から、ひとつには、日頃からの災害に向けての心構え(訓練や非常食等の備蓄など)や、災害発生時における組織力がいかに大切であるかが窺える。また、平等の意味を問いかけた声があったが、我々もこの点については、いろいろと疑問に感じている点がある。これについては、今回のアンケート調査の別の項目で論じる予定である。

(4) アンケートからの一考察

ヒトの欲求レベルから“食”を考えた時、まず第1段階として、生命維持のための食があり、第2段階として、精神的満足としての食が、そして第3段階として、機能的な食のレベルがある。最初の生命維持のための食では、食の質よりも、食べ物の存在、すなわち空腹を満たすこと、喉の渇きを癒すことが求められる。今回まとめた意見の中にもいくつか認められたが、救援物資が現場に届くまで、おおよそ3日と答えている意見が多かったが、この3日間が、第1段階の食に相当する期間と考えられるし、この期間であれば、このレベルの食をヒトは受け入れられると考えられる。つまりこの期間をどう生き延びるかということである。普段から、個人、組織、地域等で、最低2-3日の食糧と飲料水を備蓄しておくことの大切さを今回の震災では示してくれたといえる。そして、次の段階では、食の欲求レベルは上昇し、暖かい物、美味しい物というように精神的満足を望まれるようになる。この段階では、ボランティアによる炊き出しや、救援物資、また、被災者自らの炊き出しが有効となる。逆に言うならば、第2段階の食の欲求が満たされるような援助、救援活動が必要であるということである。そして、さらに食の欲求レベルは、機能性へと進んでいく。つまり、本来あるべき食の姿である。個人の生理的な状況に応じた(年齢、病気、歯の有無等)、栄養のバランスがとれた食であり、また社会的役割をもった食ということである。災害発生後、できるだけ早く第3段階まで食のレベルをもってくることは望むべくもないが、また、そのように努力すべきであるが、無理しすぎるのも問題である。栄養士の提言の中に、栄養士の仕事は食材が豊富にあって優雅な生活の中で出来る仕事かというのがあったが、その時々状況に応じて、よりベターな道をさぐり、指し示すことこそが栄養士の仕事ではないだろうか。

現代のように食品加工技術が進んでいる時代であるから、現代人の嗜好に合った、乾パンに代わる美味しい非常食の開発も望まれる。また、今回大量に用いられ、大量に廃棄されていった菓子パン、おにぎりといったファーストフードは、災害が夏場であったとしたら殆ど用いることはできないであろう。たっぷりとお湯さえ沸かせる環境を整えることが出来れば(ブロックと薪と大鍋さえあれば)、レトルト食品、缶詰などを利用して、様々な工夫ができるものと考えられる。

本アンケートでも明らかなように、被災地の中心にいる者ほど情報が少なく、混乱しているわけであるから、むしろ被災地の外にいる者が中心になって、情報のネットワークを作り、食材供給、またマンパワー確保の基地を作ると良い。つまり、被災地周辺のKey stationから被

災地のKey stationへという物資とヒトの流れを作るのである。これには、比較的自由に行動出来、学生という強力なマンパワーのある周辺大学が中心となれば良いのではないだろうか。特に食に関しては、栄養士養成校と栄養士会が連携をとって動く方が良いと考える。こういった組織が体系づけられると、例えばボランティア活動に対する後方支援といった形での資金援助も受けやすいと考える。今回の体験を通して、マンパワーはあっても資金のないところ、資金はあってもマンパワーのないところといった組織上の様々な問題もかなり明らかになったと考えている。今後、こういった違った組織間の協力体制作りも大切であると考えている。

我々は、今回、被災地に隣接していたにも関わらず、また、食教育に携わっているにも関わらず、十分な活動が出来なかったことを非常に反省している。今回の教訓を教訓とするだけでなく、実践力のある栄養士養成を目指し、生きた食教育をしていかねばならないと考えている。

最後に、このアンケートが、国際ロータリー第2660地区の支援のもとに行われたことを、記すとともに、ここで改めて、お礼申し上げます。

要約

阪神・淡路大震災の被災地における「食」に関わる様々な問題点について、被災地現場にいた食のプロである栄養士達にアンケート調査を行った。本研究では、それらの中から、本人の栄養士としての活動実態に焦点を当てまとめた。アンケートは神戸・阪神地区の栄養士150名を対象にして、4月から5月にかけて郵送で行った。回収率は34%(51名)であった。

本人に、栄養士として活動できたかという質問をしたところ、約半数の栄養士が活動できなかったと答えた。その理由の多くは、本人自身が被災者であったことに起因するが、日頃からの緊急時に対する心構えと訓練が不十分であったことも原因の1つと考えられた。また、栄養士が組織としてでなく、個人で活動しようとしたために、十分な活動ができなかったことも窺われ、組織力の必要性が提示された。また、社会に対する提言でも同様に、栄養士の地位、権限の向上の他、緊急時に対応した、組織作りの必要性が述べられていた。また、新しい非常食の開発を望む声も聞かれた。

参考資料

- (1)大阪読売阪神大震災特別縮刷版、読売新聞社(1995)

- (2)小林登史夫：有事用備蓄食糧の在り方，
読売新聞論点(1995.4.6)
- (3)特集阪神大震災3ヶ月，毎日新聞(1995.4.6)
- (4)下川裕治：芦屋女性市長震災日記，朝日新聞社
(1995)